

良質茎を早期に確保し、適期に中干しを開始しましょう

1 ワキの防止

- 田植え後20日頃から、生わら施用田ではワキの発生が多くなります。
- 近年はワキの発生時期が早く、量も多い傾向となっています。
- 夜間落水や用水の更新等により土壌への酸素供給やワキの防止を図り、根の健全化に努めることが、良質茎を早期に確保する上で大切です。

表1 ワキの発生程度とその対策

ワキの程度	ワキの発生程度	水稻生育への影響	対策	
			5月下旬	6月初旬
希	水田に足を踏み入れても気泡の発生が無い。	なし		
少	水田に足を踏み込むと僅かに気泡の発生が見られる。	なし		
中	水田に足を踏み込むと気泡の発生が多い	根の活力低下	用水の更新	用水の更新
多	水田に足を踏み込むと盛んに気泡を発生する。	根張り不良	中耕と用水の更新	用水の更新を繰り返す
甚	晴天時、自然に気泡を発生し、音が聞こえる。または水田を歩くと著しく気泡を発生する。	根の伸長阻害、地上部黄化	中耕と用水の更新を繰り返す	間断灌水

2 中干し

(1) 中干し開始のめやす

- 中干しの開始時期が早いほど倒伏程度は軽くなります。
- 目標穂数の60～80%の茎数が確保されたら、直ちに落水し、中干しを開始します。
- 過剰生育や倒伏しやすいほ場では、目標穂数の60～70%の茎数が確保された時期、減水深が大きく雑草発生の多いほ場では目標穂数の80%の茎数が確保された時期がめやすになります。



図1 幼穂形成期の生育量と成熟期の倒伏

注) 有機50%肥料栽培、平成25～27年、移植後日数は中干し開始時期を示す。開始時%は目標穂数(380本/m²)に対する中干し開始時の茎数の比率。



中干し開始適期のほ場
(目標穂数の約80%の茎数)



適期を5日過ぎてほ場
(目標穂数の約125%の茎数)

(2) 中干しの効果

○中干しの効果は、①無効茎^{*1}の発生抑制、②受光態勢の改善による光合成量の増加、③下位節間の伸長抑制による倒伏軽減、④土壌への酸素供給による根の健全化、⑤収穫時のコンバイン走行を容易にする地固め等です。

*1 無効茎：穂をつけることなく枯死する茎

○中干しが遅れると、生育過剰や籾数過剰となり、倒伏や白未熟粒の発生が助長され、収量・品質が不安定となります。

○中干しの効果を高め、生育後半の水管理を容易にするため、溝切りも必ず行いましょう。

(3) 中干しの程度と終了時期

○中干しの程度は、田面に小さなヒビが入り、軽く足跡がつくまで行います。

○ヒビが入り始めたらかん水を開始して、過度の土壌乾燥を防ぎます。

○中干しは、遅くとも出穂の1か月前までに終了します。

○中干しが強すぎたり、終了時期が遅れると、根量が少なくなり、出穂後の葉色低下が大きく、1等級比率の低下を招きます。

○中干し後は、間断かん水を行い、徐々に飽水管理（足跡の底に水がたまっている箇所が見られる程度に乾いてきたらかん水する水管理）に移行して下さい。



【中干しの強さは小ヒビ（幅1cm程度）が入る程度】

【経営普及課 農業革新支援担当 吉川 力】